本史講座谷本晃久准教授は本書が北方文化史の分野にとって得難い成果とし，高く評価している．

（長瀬　　清）

［自費出版，2015年11月，A5判，335頁，カラー3頁，問い合わせは弘南堂書店，TEL. 011（716）9427］

二至村菁 著
『米軍医が見た占領下京都の600日』

歴史ノンフィクション物語として，二至村菁さんが書かれた『米軍医が見た　占領下京都の600日』を紹介，私見を加えて書評としたい．

著者は『エキリ物語』（中公新書，1996年），『日本人の生命を守った男　GHQサムス准将の闘い』（講談社，2002年）の2書をすでに世に問うている．二書ともに読ませていただいているが，著者が名づけた歴史ノンフィクション物語という領域が図書館学にあるかを知らないが，最も適した命名かもしれない．著者は客員研究員としてトロント大学科学技術史研究所に所属したが，本書により日本の戦後期の保健衛生問題そして行政，臨床医学につき発信をしている理由がよくわかった．登場者すべてを実名により書かれた本書によれば著者は京都にて1947年生まれ，感染症が猛威をふるっていた時代に育ち，家族そして自分も結核療養の経験を持つベビーブーマー世代の一員である．大学は日本での大学生生活に入ることを選ばず，米国Earlham大学とカナダMcGill大学修士課程を経て，その後に同志社大学文学部，京都大学に学び，カナダToronto大学博士課程を修了している．日本の大学紛争の時代を経験していないことを述べている．

2009年京都で開催された第74回日本民族衛生学会総会の特別講演『戦後健康改革の原点―サムス准将の考え方』（民族衛生第75巻付録30–31頁）を行っており，評者はその機会に少し話をしたことがある．今回の著書を読み，同時代人として感ずるところを書きたい．なお評者は1949年生まれである．

本書は1947年秋から1949年春の間にGHQ京都軍政部に在籍したJohn D. Glismann（グリスマン）軍医中尉が経験した京都を中心とした医療保健事項の歴史である．グリスマンとその家族から提供されたカラー写真と手紙を主体に，それぞれに関係した人々からの取材と当時の記録を確認したノンフィクションである．物語の部分はその時代の明確な記憶をまだ持たない，幼児として生きてきた著者が語り部としてつむいでいるが，物語としてのフィクションはあまり多くないように思う．

終戦後の日本の保健医療の状況に大きな改革を行ったGHQ/PHWのCrawford F. Sams（サムス）の仕事については著者のほかにも，竹前栄次の『DDT革命』（岩波書店，1986年）や杉山章子の『占領期の医療改革』（勁草書房，1995年）などの高いレベルの研究がすでにされている．本書はグリスマン軍医25歳が，インディアナポリスの大学病院のインターン終了後の義務兵役として，米軍陸軍軍医部に入隊，極東勤務を希望しての来日，京都軍政部へ配属された600日間の経験をもとに書かれている．著者の1986年の京都府衛生部への取材によりはじまり，グリスマン医師の在所を探しての交流が得られたことによる．軍医が故郷の両親に京都から送った61通の手紙や，軍医の周りの日本人が直接軍医の両親に出した礼状，そして軍医本人から著者が譲り受けた，軍医撮影の京都での100枚を超えるカラースライドを手掛かりに進めた取材が，関係する日米での聞き取りを通して研究書となっていると思う．

25歳の軍医中尉は，日本占領軍の一員であり，日本においては運転手付公用車，メイド付宿舎，秘書付士官の立場であり，その眼を通してみた京都はそこに住んでいた人たちの日常からはおおき

くかけはなれていたものであったと考える．日本占領におけるGHQ/PHW局長サムス准将は，配下の軍医として，アメリカの戦争に携わってきた歴戦の軍医ではなく，日本兵と戦わなかった若い世代の義務兵役に就いたばかりの新米軍医を100人ほど呼び寄せたとある．サムスの『Medic』（An East Gate Book , M. E. Sharpe, 1998）の索引にもグリスマンは記載がなく，グリスマン軍医の存在はそのようなものであったろう．

1947年9月から1949年4月の間に京都での保健衛生医療問題について，グリスマンの手紙を中心にGHQ/SCAP文書やGHQ/PHW文書，日本の新聞や資料にて裏付けながら聞き取りによる肉声を含めて月順に記載（記録）している．結核療養所，引き上げ港舞鶴での問題，妊娠中絶や売春問題，731部隊からの帰還軍医，サムスと石井四郎の交流，ジフテリア予防接種事故，密輸ストレプトマイシンの処理など，ほぼ当時の問題を網羅している．その中に26として，ジフテリア予防接種事故―「ワクチンに寝首を」［11月］，という項がある．これは1948年6月にサムスの立案による予防接種法が成立したことから，グリスマン軍医の主張により，同年10月から京都にて先行されたジフテリア予防接種による68名の死亡者を出した事故の記録である．著者も接種を受けた9万7201人の中の一人であったようであるが，幸いにも健康の障害をきたさなかったようである．この事故については，事故遭遇者でありながら死亡を免れた，田井中克人氏の『京都ジフテリア予防接種禍事件―69人目の犠牲者』（かもがわ出版，2003年）があり，詳細な記録は京都府により，『京都ジフテリア予防接種禍記録』が残されている．GHQ/PHW資料も豊富であり，評者も2003年の医史学会総会にて報告している（日本医史学雑誌第49巻第1号122頁　2003年）．この事件に対する著者の本書での記載は，予防接種法の成立を見てグリスマンが先進的な行政として京都での実施を衛生部長に働きかけてはじまったとしている．接種後の副反応事故が起こりだした週末，提案者の軍医はその情報から遠いところで，思いを寄せていた秘書の退職のスキヤキの会をしていたようである．この事故についての研究者としては占領下の衛生行政の実態としてうなずけるものである．この事故は無毒化されていないジフテリア毒素による中毒であり，著者はグリスマンの思いとして「抗体を作らせた馬の血清を使って命を救うことができた．その用意をしておれば，せめて二日以内に発熱がわかっておれば」と書き込んでいるが，京都府で抗毒素血清の使用は相当に遅れたことが事実である．評者の記憶に間違いがなければ，本事故は予防接種法成立後ではあったが，全面施行以前に起こっており，法的な責任はワクチン製造のみに帰され，補償が厚生省により行われて終わったことになっている．当時ニュース映画などすべての文化活動はGHQ民間情報教育局の検閲下にあり，サムス率いるPHWと日本当局としての厚生省とメディアとの関係，京都府と被害者とのやりとりも本書ではよくわかるように描かれている．

一項のみの紹介しかできないが，大変な時代の混乱した社会，現在では非日常としかいえない事々が多く書き込まれている．生き生きとしているが抑制のきいた文章は物語としてよりも社会史と呼んでよいと考える．著者は歴史ノンフィクション物語としているが，混乱した自由でない被占領下の時代を活写した書として紹介したい．その時代はまだ，幼児であった京都市民の著者のその後の体験や，地域感覚が書き込まれており本書を読みやすいものとしている．物語としては，主語がグリスマン軍医の時と著者の時と取材した関係者の場合があり，注意して読まないと，語りがだれのものかわからないところがある．しかし，グリスマンから譲られた多数のカラー写真と，著者の取材によりえられた多くの写真を載せる事により，京都のその頃，占領下の日本が活写されている．著者本人の二歳頃の木のつっかけ履きと，八歳のワンピース姿はその間の日本の六年間を物語ってあまりあり，同世代人として笑顔の写真の意味がとてもよくわかるものである．

（渡部　幹夫）

［藤原書店，〒162-0041 東京都新宿区早稲田鶴巻町523，TEL. 03（5272）0301，2015年9月，四六判，440頁，3,600円＋税］